令和３年度第２回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会

配　付　資　料

○ 令和３年度 伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会委員 名簿・・・・・・・・・Ｐ１

○【資料１】令和３年度第１回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会の概要・・ Ｐ２

○【資料２】令和２年度の協議会での主な意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ４

○【資料３】小規模校活性化取組の総括的な検証・「協議のまとめ」について・・・Ｐ７

○【資料４】伊勢志摩地域の中学校卒業者数（予測）と県立高等学校募集定員・・ Ｐ12

○【資料５】学科別募集定員の割合（県立高等学校全日制）・・・・・・・・・・・ P13

○【参考資料１】令和 10 年度を見すえた伊勢志摩地域の県立高等学校（全日制）

の配置について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ｐ14

○【参考資料２】伊勢志摩地域　中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）・・ P15

○【参考資料３】今後の県立高校活性化の基本となる考え方について・・・・・ P16

令和３年度　伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会委員 名簿

Ｎｏ		所属及び名前	出席委員	
1	学識経験者	三重大学　大学院生物資源学研究科　教授　坂本　竜彦	○	継続
2	地域有識者	亀谷内科胃腸科　院長　亀谷　章	○	継続
3		鳥羽商工会議所　専務理事　清水　清嗣	○	継続
4		志摩市商工会　事務局長　石野　雅彦	○	継続
5		度会町商工会　事務局長　冨内　伊佐雄	○	新
6	教育長	伊勢市教育委員会　教育長　北村　陽	○	継続
7		鳥羽市教育委員会　教育長　小竹　篤	○	継続
8		志摩市教育委員会　教育長　舟戸　宏一	○	継続
9		度会町教育委員会　教育長　中西　正典	○	継続
10		南伊勢町教育委員会　教育長　片山　嘉人	○	継続
11	県立高等学校長代表	角屋　貴久　（県立南伊勢高等学校）	○	新
12	小中学校長代表	伊勢市　平本　秀次　（伊勢市立五十鈴中学校）		新
13		鳥羽市　掛橋　敏也　（鳥羽市立加茂中学校）	○	新
14		志摩市　山口　泰弘　（志摩市立東海中学校）		新
15		度会郡　福井　清　（南伊勢町立南島中学校）	○	新
16	小中学校ＰＴＡ代表	伊勢市ＰＴＡ連合会　代表　山田　純也　（伊勢市明倫小ＰＴＡ）	○	継続
17		鳥羽市ＰＴＡ連合会　代表　今井　進也　（鳥羽市鳥羽東中ＰＴＡ）	○	新
18		志摩市ＰＴＡ連合会　代表　山路　浩一　（志摩市磯部中ＰＴＡ）	○	新
19		度会郡ＰＴＡ連絡協議会　代表　森井　一晴（度会郡南勢中ＰＴＡ）	○	新
20	高等学校ＰＴＡ代表	南勢地区高等学校ＰＴＡ連合会代表　山下　晃司（南伊勢高校度会校舎ＰＴＡ）	○	新
21	小中学校教員代表	伊勢市　坂口　直矢　（伊勢市立明倫小学校）	○	新
22		鳥羽・志摩地域　里中　洋典　（志摩市立東海小学校）		新
23		度会・南伊勢地域　松田　直樹　（玉城町立玉城中学校）	○	新
24	高等学校教員代表	三橋　哲夫　（県立伊勢工業高等学校）	○	継続

資料１

令和３年度第１回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会（８／５）の概要

１　日時　　令和３年８月５日（木）19 時 00 分から 21 時 00 分まで

２　場所　　伊勢庁舎４０１会議室

３　概要

次期「県立高等学校活性化計画」の策定に向けた動きや小規模校活性化取組の総括的な検証等を共有し、今後の中学校卒業者数の減少や当地域を取り巻く県立高校の現状や課題をふまえ、これからの伊勢志摩地域の県立高校のあり方について協議しました。

主な意見は次のとおりです。

≪伊勢志摩地域の高校のあり方について≫

○　小規模校は生徒が少ない分、生徒一人ひとりに丁寧な指導がしやすくなるメリットがある一方、教員数が少ないためにデメリットも多い。例えば、一人の教員で複数の校務分掌を担当するため負担が増えることや、教科によっては１人しか教員が配置されず、研修も十分にできない状況などがある。また、設置できる部活動の種類も制限されるなど、教員の働き方や資質向上の面だけでなく、生徒の学びの質の保障という観点からも課題がある。

○　小規模校においては、この４年間、活性化の取組を進める中で、教員数の減少に伴い、一人あたりの仕事量が増えているにもかかわらず、現場の教員は生徒の成長を感じながら頑張ってきた。

○　伊勢志摩地域の県立高校のあり方を考えるにあたっては、中学生やその保護者の目線を大切にしながら、子どもたちが幸せな将来を創るための力をつけることができるような各学校の魅力を中学生に伝えることが重要になってくる。

○　小学校現場にいると児童数の減少を肌で感じる。高校においても、高校間の交流等でＩＣＴを効果的に活用するなど、少人数でも学習の幅を拡げることが必要だ。また、小学校の児童に将来なりたい職業について尋ねてみると、第１次産業は０人、第２次産業で数人、その他は第３次産業という結果となる。小学生のころから、地場産業を含め、様々な職業をもっと身近に感じることのできるキャリア教育を進める必要がある。

○　地域の高校では地域の資源を活用した学習活動が進められていることがよく分かったが、現在の少子化の流れは学校や教育の力だけでは止められるものではない。今後は小規模校における地域と一体となった学習活動の成果を活かしつつ、再編統合によって、伊勢志摩地域全体で地域の子どもたちの教育を考えていくことが必要だ。

○　子どもの進路選択において、保護者は、子どもが良い人生をおくることができるよう、子どもの意思を尊重する場合が多い。一方で、高校進学で地元を離れ、大学進学で三重を離れてしまって戻ってこないという子どももいる。大学生であっても自分の学習や研究にしか興味がなく、自分が社会に対して何ができるのかを考えていない場合もあるため、小中高の時代にふるさとに関する学習や地域の課題に触れることは子どもたちの将来に大きな影響を与えると考えられる。

○　子どもたちの数が激減していく中で、この地域の高校をどのように変えていくのかについて、現実的で具体的な議論をしていくべきと考える。例えば、伊勢工業高校と宇治山田商業高校の再編統合についても、ただ単にスケールメリットの問題だけでなく、モノを作る工業とそのモノを売る商業が同じ学校となって切磋琢磨しながら学ぶことは、生徒にとっても教員にとってもより意味のある学びをつくることができると考える。また、宇治山田高校と伊勢高校の普通科同士の再編統合も考えてもよいのではないか。

○　小規模校の活性化取組も一定の成果をあげていると感じている。このコロナ禍の中でわかったことは、ＩＣＴの活用は教育においても様々な可能性を拡げることができるということである。

○　教育の役割とは人材育成であり、中学生には自分の将来を見据えた高校を選択していく力も必要であると考えている。また、高校においても、地域を知って地域で学ぶ学習は大切であるため、地域と一体となった高校の魅力化はこれからも必要である。さらに、少子化の中でも高校には多様な生徒のニーズに応える必要があり、地域の子どもたちの学びを保証するためにも、１学級 40 人の枠を柔軟に運用したり、ＩＣＴをうまく活用したりするなど、今後も様々な工夫を考えるべきである。

○　地域の中学校から多くの生徒が伊勢市内の高校へ進学する理由は、地域の高校に魅力がないのではなく、小さい時から同じ人間関係にある少人数のグループから少しでも多様で多くの生徒が集まる集団で社会性を育みたいという生徒や保護者の意向があるからである。地域の小規模校がより特色化を進め、県外からも生徒が集まることができるよう、入学者選抜の規制をなくすことも含めて検討する必要があるのではないか。

○　この地域の教育に携わるものは、将来の伊勢志摩地域を担う人材を育てているという意識をもう一度認識すべきである。地域の子どもたちに、ふるさとを大切にするという意識を育んだうえで、この自然豊かな伊勢志摩地域の産業を如何にビジネスに変えて地域を発展させていくかを考えるような、将来の伊勢志摩地域のリーダーを地域全体で育てていく意識を共有していくべきである。

資料２

令和２年度の協議会での主な意見

１　子どもたちに育みたい力をつけるための教育について

○　三重県の県立高校においては、新学習指導要領にある「生きる力」、及び三重県教育ビジョンにある「生き抜く力」が各校に共通する育みたい力である。加えて職業高校においては「社会の一員として働ける力」や「一生学び続ける向上心」を養うことが大切である。

○　生徒がより興味を持ち、主体的に学べる教育内容や方法の工夫が必要である。魅力ある授業こそが魅力ある学校につながり、ひいては生徒も多く集まる学校となる。

○　地域への愛着心を育ててもらいたい。高校生が地域について学習して愛着心をもつことで、卒業後に進学や就職で一度地元を離れても、いつか地元に帰ってきたいという思いを育てることが大切である。

○　今後ＡＩが人間の知能を追い越していくと言われている中で、現在の教育も変わる必要がある。「高校生自身が自分は何を、なぜ学ぶのかを自発的に考えられる力」を、小中学校で育て、生徒一人ひとりが自ら高校を選びとる力をつけることが大切である。それが一生学び続ける力をつけることにつながる。

○　小中学生だけでなく、高校生も学校の授業の中で社会での実体験を積むことによって学びが広がり、将来職業を主体的に選択できる意識を育むことができる。

２　地域における小規模校について

○　地域の小規模校はこの３年間活性化に取り組んできたが、地域の中学生がさらに減少していく中では、現実的には限界に近づいている。これからは再編統合の具体的な議論をはじめていくことが必要である。

○　現「県立高等学校活性化計画」において、各校で活性化の取組が進んでいるが、小規模校においてはその成果は限定的であり、分校化や校舎制などとしても存続は難しいと考える。高校現場からの視点で考えると、教育の質の確保のためには一定の規模が必要であり、小規模化することによる高校の魅力低下は避けられない。伊勢志摩地域全体を一つの地域として考えたうえで、それぞれの県立高校の魅力を高めることが必要である。さもないと規模の大きな私立高校や他地域への流出が加速することになる。この地域の未来のために責任ある選択をしなければならない。

○　活性化の取組により小規模校の魅力が向上していることは理解できるが、地元中学から地域の小規模校への進学率が低いまま伸び悩んでいることを考えると、現実的には再編統合を進めていく必要がある。鳥羽高校、志摩高校、水産高校の３校再編のアイデアも出たが、鳥羽高校は志摩方面よりも伊勢方面への交通の便が良いため、伊勢市内の高校との再編統合の方が望ましいのではないか。また、当地域での私立高校における入学者の定員超過等については、もっと問題視すべきである。

○　道路事情が改善して広い地域からの通学が可能となったため、現状では伊勢志摩地域全体が一つの通学圏内としてとらえることができる。高校は、次世代を育てる地域の核として重要であり、将来地域に戻って地域を支える人材を育てる場所でもあることから、地域の小規模校だけでなく、

伊勢市内の高校においても地域を題材として探究に取り組む学習プログラムを行うことが大切である。

○　人口減少が急速に進む中で、生徒減に対応して高校の規模を見直すことは大変重要であるが、もっと長いスパンに立って、子どもたちを将来地域に残って活躍する人材に育てる教育も考えていくべきではないか。

○　国の普通科改革でも言われているように、地域の小規模校では、たとえば地域医療と観光分野に特化したカリキュラムや学科をつくり、技術だけでなく地域の活性化に貢献する意欲を育む取組を展開するなど、学科やコースをその地域の特徴やニーズに合うものに変えていくことも必要ではないか。

○　地域の小規模校をはじめ各県立高校は、子どもたちが希望ある将来を思い描き、一度は地域を離れてもいつかは戻りたいと考えるような、より魅力的な学校づくりを進め、それを地域に発信していく必要がある。

○　これからの地域の県立高校のあり方を考える場合には、今までの枠や考え方にとらわれずに新しい発想が必要である。大幅な大学入試の改革、1 学級 40 人以下の少人数教育、オンラインを活用した小規模校での学び等の様々な知恵を出していけば、子どもたち一人ひとりに充実した学びを保障できる夢のある将来像も見えてくるのではないか。

○　地域の高校は活性化に取り組んで魅力ある学校づくりを進めており、それぞれの高校には多様な個性や幅広い学力に対応するなど、それぞれが果たす役割や存在価値がある。今後更に少子化が進んでいくなかで、子どもたち一人ひとりはより貴重な人材となるのだから、小中学校において進んでいる少人数教育を高校においても積極的に推進すべきである。

○　鳥羽・志摩・度会地域の各小規模校はいずれも定員を満たしていない現状ではあるが、今後５年から 10 年の間はまだその役割は残されている。当地域の小規模校の欠員数と地域の私立高校の定員超過はほぼ一致していることから、地域の小規模校の存続を危うくしている要因の一つと考えられ、対応すべき大きな問題である。また、小規模校の再編統合が進めば、この地域の高校の配置が伊勢市に集中してしまうことが想定されるが、果たしてその状況があるべき姿であるか疑問が残る。

○　地域の小規模校は地域の活性化にも貢献しており、地域にはなくてはならない存在である。40 人以下の学級編成やＩＣＴ機器の活用などの工夫をすることによって、小規模校の維持・存続を図ってほしい。その際、部活動の活性化については、国においても地域スポーツクラブへの移行等の方針が検討されていることから、これまでのように問題視する必要がなくなるのではないか。

○　志摩高校、水産高校は、地元として必要な高校であり、是非とも維持してもらいたい。

○　水産高校では地域の水産業と密着した専門的な学習や全国的なレベルでの資格取得において成果をあげたり、志摩高校でも地域医療と連携した学習を行ったりするなど、地域の中に高校がある意味は大きい。今後の生徒減の予測からは、どこかの学校が再編統合されるのは致し方ないのかもしれないが、40 人にこだわらない学級定員とするなどの工夫で小規模校を維持してもらいたい。

３　伊勢志摩地域全体の県立高校のあり方について

○　令和 10 年度の伊勢志摩地域の県立高校の学級数の予想は 24～26 学級とあるが、単純に現在地域にある 10 校で割ると、1 校あたりは 2.6 学級あまりとなる。このような状況に対し、県教育委員会としてはこの地域の県立高校の今後のあり方についてどのように構想しているのか、その方向性を教えてほしい。

⇒（政策課）単純に地域全体の学級数を学校別に均等に分配するような高校の配置は考えていない。各校の学びの特色や役割を考慮し、伊勢志摩地域を一つの通学地域と考え、グランドデザインを検討していく方針である。

○　今後の伊勢志摩地域の状況を考えると、高校の再編統合を検討していく時期に差し掛かっていると思われるが、それが単なる数合わせのための再編統合ではなく、もっと大きな視点をもって地域の高校の配置や教育内容を深く考えていくべきである。

○　鳥羽・志摩・度会地域の小規模校での活性化の取組により、その高校でしか体験できない少人数による教育内容が充実しつつあるが、教員数の減少もあり高校への負担も大きく、今後の少子化の中では、さらなる人員や予算の支援がない限り学校現場の努力だけでは限界がある。現実的には伊勢志摩地域の高校の現状は限界に近く、さらなる大幅な予算拡充策等が不可能な場合は、学校現場に任せるのではなく県教育委員会が主導して学校の再編も含めた判断や決断を早期に行うべきである。

○　急激な人口減少の中で、小規模校において地域の子どもたちを少人数で育てていくことは大切であるが、その維持にはオンラインを活用するなど、様々な知恵やアイデアが必要である。例えば、当地域で進めてきた地域課題解決型の学習を伊勢市内の高校でも実施していくことで、伊勢志摩地域全体で連携し、将来当地域で活躍できる人材を地域全体で育てていく教育システムを構築することができる。

○　伊勢市内の専門学科設置校の３校は、来年度にはすべて１学年４学級規模となるが、これ以上の小規模化は教員数をはじめとする専門性や多種類の部活動の維持などに影響を及ぼし、学校全体の活力がなくなると危機感を感じている。専門学科設置校の再編・統合を視野に入れるなど、伊勢市内の高校のあり方も検討するべきと考える。

○　伊勢工業高校では、これ以上の小規模化には耐えられないと考えている。職員たちも他の専門学科高校との再編等を視野に入れて、伊勢志摩地域全体の専門教育の充実や部活動の活発化を目指した将来の学校像を構想している。

○　専門学科の学びは魅力も高く、地域にとっても必要不可欠なものであり、なくすことができないものである。令和３年度からは伊勢工業高校と宇治山田商業高校も４学級規模となるため、一つの学校として再編していくメリットは十分あると考える。

１　鳥羽高校・協議のまとめ

鳥羽高校は、鳥羽市唯一の高等学校として、また南勢地区唯一の総合学科高等学校として「観光ビジネス」「スポーツ健康」「総合福祉」「文理進学」の４つの系列を展開して、鳥羽市や地域の方々の支援を得ることで、地域の教育資源を活用した特色ある教育活動を進めてきました。

文理進学系列の２年生では、系列選択科目「鳥羽学」において、海女文化を発信するＶＲ制作等の地域課題解決型学習に取り組んできました。また観光ビジネス系列および総合福祉系列の３年生では、毎週、地域の事業所で、終日働くことを通して自分の生き方・在り方などを考える「デュアルシステム」にも積極的に取り組んできました。さらに、小中学校との連携・交流、地域行事へ参加し、地域社会をささえる若者が育ち合う学校をめざして教育活動を推進してきました。

希望する進路実現に向けては、一人ひとりが必要な基礎学力を身につけ、自信や自己肯定感を持てるよう、スタディサプリを利用した個別最適な学びを推進しました。

地域の少子化も急激に進行する中、入学者数を確保するために鳥羽高校の活性化の取組みをホームページ・新聞・広報などを通じて情報発信してきました。また、生徒の学校生活も落ち着いてきており、鳥羽高校へのイメージは以前より改善しつつあるものの、地域の中学生は伊勢市内への志向が強いことから、鳥羽市出身者の割合が低下し、入学者の増加にはつながらず、定員は未充足の状況が続いています。なお、入学者全体では、伊勢市出身者や、近年は明和町や松阪市から進学する生徒の割合が増えてきている状況となっています。

総合学科は多様な生徒の学びに対応し、様々な体験や実習を通して各生徒の将来の生き方・在り方を考えさせることが魅力の一つですが、鳥羽高校は現在、27 人の教員で運営をしており、幅広い選択を可能とする教育課程を編成することが難しくなってきています。生徒たちにおいても、互いに認め合い、協力し合い、切磋琢磨することで思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育むことを目指していますが、今後更に生徒数が減少することにより、そのような学びを進めていくことが難しい状況も考えられます。

また、部活動においては、顧問や生徒数が減り、チームとしての活動が制限される競技もでてきているのが現状です。

少子化がさらに進む中においても、地域全体で子供たちの多様な学びを実現し、将来の伊勢志摩地域を担う人材を育てていくためには、鳥羽高校だけでなく地域全体で、これからの高校における学びや望ましい学校規模と配置も含めた今後の在り方の協議・検討を進めていく必要があると考えます。

２　志摩高校　協議のまとめ

志摩高校は志摩市唯一の普通科高校として、地域と連携・協働し、探究活動「志摩学」をはじめとする地域の教育資源を活用した特色のある教育活動を展開し、生徒のキャリア育成や志摩市を担う当事者意識を醸成するとともに、地域に愛され、地域とともにある学校を目指して学校活性化に努めてきました。また、志摩高校の様々な取組について情報を発信し、地域からの認知を得るとともに、地域の中学生等への丁寧な説明を行うことで進学希望者の確保を目指してきており、例年、生徒の９割以上が志摩市内中学校出身者となっています。

地域の教育資源を活用した特色のある教育活動の展開に加え、志摩高校ではすべての生徒に対する基礎学力の定着と進路実現に向けた指導の充実、教育・医療分野の上級学校への進学希望生徒に対する指導の充実等、きめ細やかな教育活動をおこない、一定の成果をあげてきました。また、部活動においても、ここ数年の間に相撲部のインターハイ出場、美術部の国際美術展最優秀校賞受賞などの成果をあげています。

一方で、志摩市においてはもともと伊勢方面への志向が強く、鉄道・バスの利便性が高まったことや、令和２年度からは私立高等学校の授業料が実質無償化になったことから、伊勢市内の高校へ進学する生徒の割合がますます高くなっている状況であり、様々な取組が志摩高校への進学者増にはつながっていません。今後の市内中学校卒業者数の推移を考慮に入れると、志摩高校の入学者増のためには、志摩市内中学校からの進学者を増やすとともに、志摩市以外からの入学者増も必要ととらえ、市外に向けた広報活動にも取り組んでいるところですが、市外からの入学者はごく限られた人数に留まっています。

志摩高校は現在、１学年２クラス、２学年２クラス、３学年３クラスの計７クラスに 223 名の生徒が在籍し、これに対して常勤の教諭・臨時的任用講師は短時間勤務を含めて 22 名となっています。現状でも校務分掌や教育活動、部活動の顧問等において人員が不足しており、一人の教員が複数の役割を担わざるをえず、生徒の幅広いニーズにきめ細やかに対応していくことが困難になりつつあります。また、生徒数や教員数が減少したことにより、令和３年度の部活動は令和２年度から３部減少した 13 部となりました。令和４年度の募集は２クラスとなっており、それに伴って教職員数や学校全体の生徒数が更に減少することから、志摩高校の特色であるきめ細やかな教育活動の継続や、生徒のニーズに対応した部活動の実施は困難になることが予想されます。

将来この地域を担うことのできる人材育成に向けて、今後も、生徒一人一人の多様なニーズに応えることができるきめ細やかな教育活動を行い、また、生徒が集団の中で互いに成長していく場を提供し続けることが重要です。少子化がさらに進行する中で、その実現に向けて志摩高校だけで完結させることにとらわれず、伊勢志摩地域全体を見渡して、高等学校の果たす役割と望ましい学校規模・配置について、早急に検討をしていく必要があると考えます。

３　水産高校　協議のまとめ

水産高校は県内唯一の水産学科を有する高校として、地元志摩市や水産関連施設等と連携・協働し、各学科・各コースが水産の専門的な知識や技術と地域産業の資源を活用し、県内水産関連産業の現状と課題を探りながら、改善提案を行う探究活動を展開するとともに、大型実習船での操業実習、海洋環境調査、国際航海を通じて、水産関連産業の担い手育成に取り組んできました。

更に、資格対策課外講座体制の充実によって、水産・海洋系の教職員の養成や高度な海技士資格を目指す専攻科への進学希望者の増加に努めてきました。

一方で、地域の少子化が進行する中、入学者の確保に向け、こうした活性化の取組を積極的に情報発信するとともに、志摩市の協力も得ながら市内中学校対象の出前講座等をとおして魅力発信に取り組んできましたが、市内からの入学者は減少しました。また、市外遠方の中学校に対しては個別に訪問し魅力発信を進めたことで、入学者数は微増しましたが、全体では入学者数の増加にはつながっていません。市内中学校からの水産高校への期待は、以前に比べ高まってきているものの、子どもたちの多様化する進路希望を実現するため、伊勢市内の高校への進学志向が強く、本校の水産学科だけでは対応ができていません。他方、市外遠方や県外からの入学者数は、交通不便の環境下においても増加傾向にあるものの、受入先（下宿）の開拓・確保が進まないことが課題となっており、積極的な入学生の募集が難しい状況にあります。

水産高校では、基礎学力の定着と専門性の深化に向け、現在、水産学科と共通教科の教科横断的な学びを推進しています。しかし、共通教科の教員はほとんどの教科で１名配置となっており、選択科目の充実や組織的な進学支援体制づくりなど難しい状況です。また、部活動についても団体スポーツ競技に挑戦する部員不足や水産高校ならではの種目を設置しようとすると、現在ある部活動の継続が難しくなるなどの課題があります。

このことを踏まえ、今後更に少子化が進む中、子どもたちの多様な学びを実現し、将来の水産業と伊勢志摩地域を担う人材を育成していくためには、伊勢志摩地域全体を見据えて、適切な学校規模と配置を協議・検討していく必要があると考えます。

4　南伊勢高校南勢校舎　協議のまとめ

南伊勢高校南勢校舎では、南伊勢町や地域の方々の支援を得ながら、地域創生アドバンスコースでの地域と連携した地域課題解決型学習や防災教育、地域のイベント等における地域の小中学生や地域出身の大学生との協働による地域活性化に向けたSBPの活動、部活動や遠隔授業等での度会校舎との交流・連携強化等の取組を進めてきました。

また、放課後の進学就職対策課外授業や、大学進学給付型奨学金の補助制度などによる町の手厚い支援によって、自らの将来に対する目的意識を持ちながら大学へ進学する生徒や地元南伊勢町内の企業に就職する生徒が増加しました。

一方で、地域の少子化が進行する中で入学者数を確保するため、こうした南勢校舎の活性化取組を、町内中学校や地域の協力を得ながら、町内中心に積極的に情報発信してきましたが、南勢校舎の入学者増加にはつながらず、町外からの入学者も数名にとどまっています。南伊勢町では、南勢校舎へのイメージは以前より改善しつつあるものの、高校進学に関して伊勢市内への志向が強く、さらに、子どもたちが希望する学びが多様化している中、現在の南勢校舎における普通科の学びだけでは十分な対応が難しいことも影響しています。

南伊勢高校は現在、南勢・度会両校舎あわせて１学年２学級規模の学校としており、南勢校舎ではおよそ１学級規模の教職員数で運営しています。こうした中、多くの教科の教員が一人であるとともに、部活動についても９つの部活動の顧問を12人の常勤の教員（養護教諭、実習教員等を含む）で担っています。また、他校においては複数人で担当している校務分掌についても南勢校舎では１人の教員で担当し、教員１人あたりの業務量が増加しています。こうした状況は、生徒の希望に沿った選択科目の設置を難しくするとともに、多様な部活動の実施ができないなど生徒の学校活動に制約が生じています。

今後、少子化がさらに進む中、子どもたちの多様な学びを実現し、将来の伊勢志摩地域を担う人材を育てていくことについては、南伊勢高校１校だけでなく伊勢志摩地域全体において、これからの高校での学びや望ましい学校規模と配置も含めた今後のあり方の協議・検討を進めていく必要があると考えます。

５　南伊勢高校度会校舎　協議のまとめ

南伊勢高校度会校舎では、度会町・地域の方々の支援を得ながら、地域課題解決型学習、地域産業についての体験学習、地域機関との交流学習等を進めてきました。併せて、町の支援により放課後の進学対策課外授業や公務員対策講座なども実施してきました。こうした取組の結果として、一定数の生徒が度会町や伊勢地域に就職しています。過去3年でみると、H30年度には、全就職者42人中22人が地域企業に就職、同様に、R1年度には41人中12人が、R2年には21人中11人が地域企業に就職しています。度会町企業への就職もH30年度、R2年度にそれぞれ2人います。また進学においても、地元大学への進学を含め、進路希望を実現した生徒も多数います。また、度会町と連携する中で、町の様々な行事に度会校舎の生徒がボランティアとして参画するなど、度会校舎が度会町の活性化に欠かせない存在となる側面も生まれてきました。

併せて、度会校舎では、一人ひとりの生徒にきめ細かく関わりながら、中学校までの教育内容の学び直し等を必要に応じて行ってきました。その中で、学力が向上したり、資格を取得したりすることにより、自己肯定感が高まった生徒が多くいます。また、度会校舎への入学者の中には、「本校が第1志望ではなかった」という生徒が少なくありません。そのような生徒が、度会校舎で安心して積極的に学校生活を送る中で、学校に愛着を持つようになり、満足して卒業していくというケースが多数あります。これらは、度会校舎の重要な存在意義だと考えます。

こういった取組の成果を、学校・度会町の双方で様々な形で発信してきました。そのことが度会校舎のイメージアップにつながったという評価もあります。

一方で、これまでの取組を検証する中では、就職に直結する取組、中学生へのPRや、地元の度会中学生が度会校舎に興味関心を持ってもらうような連携といった面における課題も見えてきました。そうした個別的な課題が、少子化の進行と相まって、十分な入学者の増加につながらなかったと考えられます。

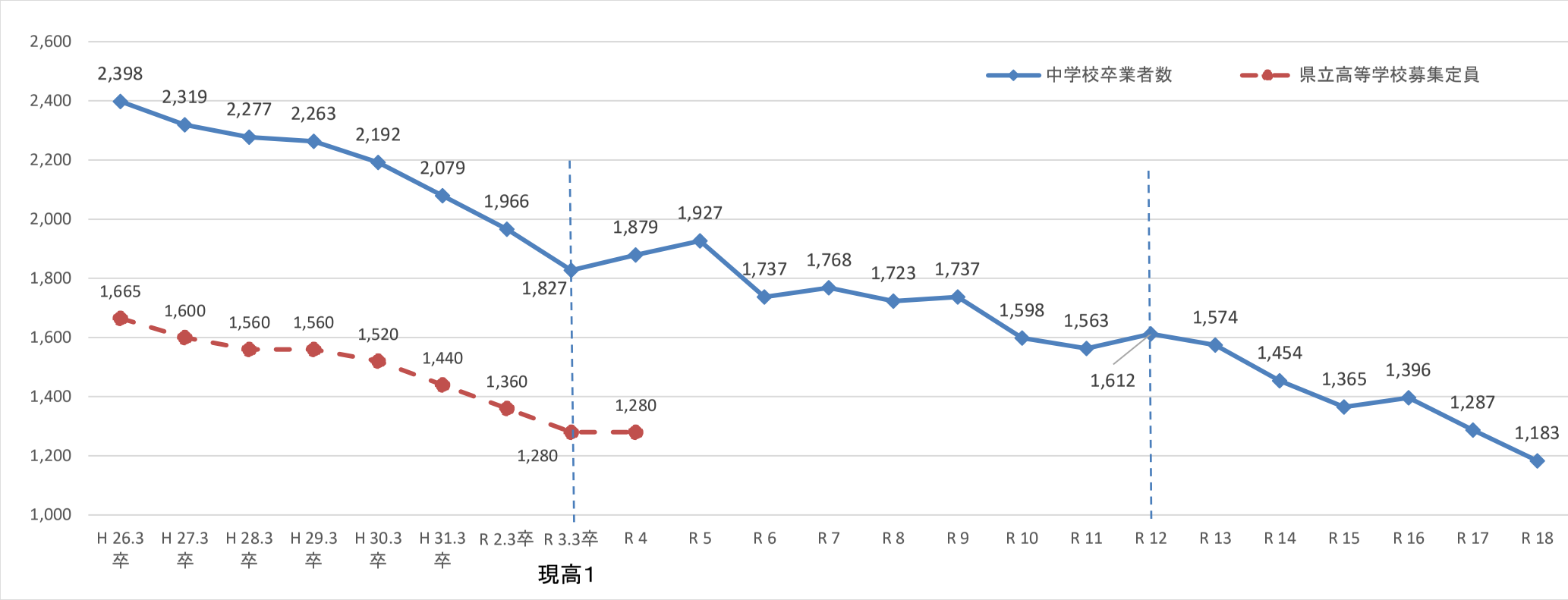
南伊勢高校は現在、度会・南勢両校舎あわせて１学年２学級規模の学校となっており、度会校舎はおよそ１学級規模の教職員数で運営しています。そのため、生徒の希望に沿った選択科目の設置や多様な部活動の実施等が困難になってきています。また、教職員数の減少により１人あたりの業務量が増加しています。そのような状況の中で、度会校舎が大切にしてきた、一人ひとりの生徒に対するきめ細かな関わりを維持する努力を続けています。

今後、少子化がさらに進む中で、「度会町を含む伊勢志摩地域の子どもたちの学びや他者と共生する力の育成をいかにして保障していくか」を、度会校舎がこれまで伊勢志摩地域で果たしてきた役割をふまえつつ、考えていかねばなりません。また、伊勢志摩地域の子どもたちの多様な学びの実現や将来の地域を担う人材の育成ということについては、度会校舎１校での協議だけでなく、伊勢志摩地域全体で、これからの高校の学びや、望ましい学校規模と配置も含めた今後のあり方について協議・検討を進めていく必要があると考えます。

伊勢志摩地域の中学校卒業者数（予測）と県立高等学校募集定員

資料4

※R13年度以降は地域の出生数を記載



伊勢志摩地域の出生数

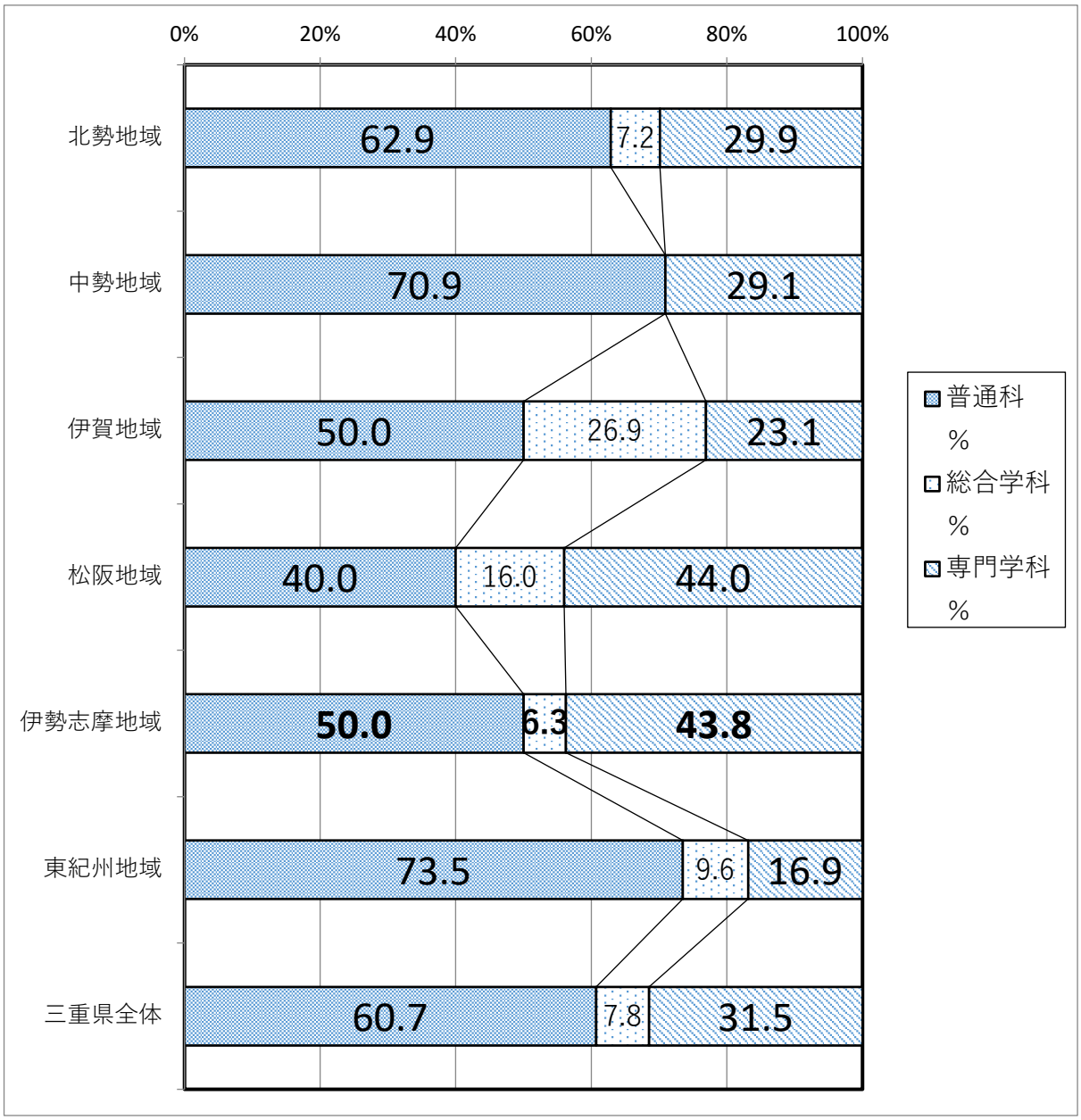
	H26年度出生 現小1	H27年度出生 5～6才	H28年度出生 4～5才	H29年度出生 3～4才	H30年度出生 2～3才	R元年度出生 1～2才	R2年度出生 0～1才
伊勢市	962	935	864	814	883	811	761
鳥羽市	98	108	109	94	98	83	65
志摩市	287	258	240	227	209	205	177
度会郡	274	273	241	230	206	188	180
合　計	1,621	1,574	1,454	1,365	1,396	1,287	1,183

学科別募集定員の割合（県立高等学校全日制）

資料５

	普通科 %	総合学科 %	専門学科 %
北勢地域	62.9	7.2	29.9
中勢地域	70.9	0.0	29.1
伊賀地域	50.0	26.9	23.1
松阪地域	40.0	16.0	44.0
伊勢志摩地域	**50.0**	**6.3**	**43.8**
東紀州地域	73.5	9.6	16.9
三重県全体	**60.7**	**7.8**	**31.5**

※　令和3年度の県立高等学校募集定員（全日制）



参考資料１

令和１０年度を見すえた伊勢志摩地域の県立高等学校（全日制）の配置について

令和４年度（次期活性化計画１年目）
３２学級
伊勢志摩地域の中学校卒業者数
１，８７９人　（現中３）

→

令和６年度（次期活性化計画３年目）
２７～２９学級
伊勢志摩地域の中学校卒業予定者数
１，７３７人　（現中１）

R4 年度から
▲142 人

→

令和 10 年度
２４～２６学級
伊勢志摩地域の中学校卒業予定者数
１，５９８人　（現小３）

R4 年度から
▲281 人

宇治山田高校	普通科	５学級	２４学級
伊勢高校	普通科	７学級	
伊勢工業高校	専門学科	４学級	
宇治山田商業高校	専門学科	４学級	
明野高校	専門学科	４学級	
南伊勢高校 南勢校舎	普通科 度会校舎	２学級	８学級（学校別協議会設置校）
鳥羽高校	総合学科	２学級	
志摩高校	普通科	２学級	
水産高校	専門学科	２学級	

宇治山田高校	普通科
伊勢高校	普通科
伊勢工業高校	専門学科
宇治山田商業高校	専門学科
明野高校	専門学科
南伊勢高校 南勢校舎	普通科 度会校舎
鳥羽高校	総合学科
志摩高校	普通科
水産高校	専門学科

大学進学をめざす普通科への志願者は多く、多様な科目設置に対応するためには、一定の規模が必要

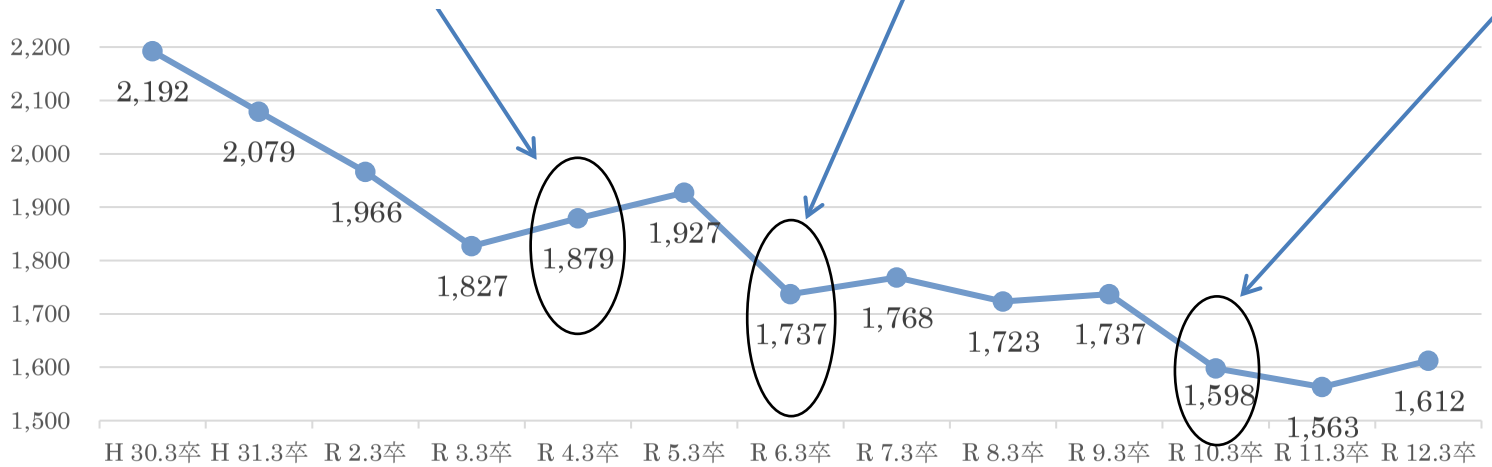
３校とも１学年４学級規模となり、これ以上の小規模化は単独での専門教育の維持が困難

各地域と一体となった活性化に取り組んでいるが、生徒募集に関しては大幅な欠員が発生

現在の規模を維持するためには、全県下から志願者が集う状況が必要

伊勢志摩地域の
県立高校
（全日制）

伊勢志摩地域の中学校卒業者数（令和３年５月１日調べ、令和３年３月卒以降は予測値）



学科の割合（令和３年度）

普通科	専門学科	総合学科
50.0%	43.8%	6.3%

※伊勢志摩地域における県立高校と私立高校の募集定員の比率、中学校卒業者が市町を越えて高校進学する比率が、現在と大きく変わらない場合の予測に基づく。

※地域における募集定員の普通科・専門学科・総合学科の比率、伊勢市内の高校と鳥羽・志摩・度会地域の高校の比率が、現在と大きく変わらない場合の予測に基づく。

※中学校卒業予定者数は、令和３年５月１日時点の教育政策課による予測数値

伊勢志摩地域　中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）

令和３年５月１日 教育政策課調べ

参考資料2

		H 15.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
伊勢市	卒業者数	1,510	1,196	1,170	1,087	1,057	1,083	1,126	981	1,034	1,000	1,029	988	899	969
	前年度対比			-26	-83	-30	26	43	-145	53	-34	29	-41	-89	70
	R3.3対比						26	69	-76	-23	-57	-28	-69	-158	-88
度会郡	卒業者数	552	383	369	358	308	315	336	313	322	292	303	265	268	277
	前年度対比			-14	-11	-50	7	21	-23	9	-30	11	-38	3	9
	R3.3対比						7	28	5	14	-16	-5	-43	-40	-31
鳥羽市	卒業者数	294	181	140	132	149	143	122	107	119	111	107	98	114	86
	前年度対比			-41	-8	17	-6	-21	-15	12	-8	-4	-9	16	-28
	R3.3対比						-6	-27	-42	-30	-38	-42	-51	-35	-63
志摩市	卒業者数	653	432	400	389	313	338	343	336	293	320	298	247	282	280
	前年度対比			-32	-11	-76	25	5	-7	-43	27	-22	-51	35	-2
	R3.3対比						25	30	23	-20	7	-15	-66	-31	-33
小計	卒業者数	3,009	2,192	2,079	1,966	1,827	1,879	1,927	1,737	1,768	1,723	1,737	1,598	1,563	1,612
	前年度対比			-113	-113	-139	52	48	-190	31	-45	14	-139	-35	49
	R3.3対比						52	100	-90	-59	-104	-90	-229	-264	-215
県内合計	卒業者数	20,468	17,458	16,811	16,489	15,777	16,212	16,046	15,871	15,549	15,405	15,220	14,700	14,343	14,077
	前年度対比			-647	-322	-712	435	-166	-175	-322	-144	-185	-520	-357	-266
	R3.3対比						435	269	94	-228	-372	-557	-1,077	-1,434	-1,700

伊勢市内高校（県立全日）	学級数（募集）		28	26	26	24	24
	欠員		12	2	15	3	―
伊勢以外高校（県立全日）	学級数（募集）		10	10	8	8	8
	欠員		79	84	77	117	―
伊勢地区高校（県立全日）	学級数（募集）		38	36	34	32	32
	欠員		91	86	92	120	―
県内（県立全日）	学級数（募集）		306	293	285	271	274
	欠員		279	192	339	325	―

（私立、高専入学者の状況）

皇學館	募集		340	320	320	315	315
	入学者数		400	336	378	323	―
伊勢学園	募集		230	220	220	220	230
	入学者数		221	243	245	283	―
鳥羽商船	募集		120	120	120	120	120
	入学者数		118	122	126	128	―
３校の欠員数（合計）			-49	-41	-89	-79	―

※令和4年度募集は8月下旬公表予定

※欠員の（ー）は、定員を超過した入学者数を示す。

（参考）

三重	募集		540	530	530	530	540
	入学者数		568	591	624	548	―

参考資料３

今後の県立高校活性化の基本となる考え方について

次期「県立高等学校活性化計画」の基本的な考え方

（１）新しい時代を生き抜いていく力の育成

ア）人生 100 年時代の中で、自立した学習者として学び続けることのできる力の育成

イ）さまざまな変化に主体的に向きあいながら、新たなことを学び、挑戦する意欲の育成

ウ）自らの生き方や働き方について考えを深め、学ぶことと自己の将来とのつながりを見出していくことのできる力の育成

エ）多様な選択肢の中から進路を決定する能力や人間関係を築く力の育成

オ）諸課題の解決に向けて自分の意見や考えを伝えあい、他者と協働してより良い社会を形成しようとする力の育成

（２）新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進

ア）全ての生徒における主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善

イ）生徒一人ひとりの状況に応じた指導と個々の生徒に応じた学習活動の提供などの個別最適な学び

ウ）文系・理系を問わず、教科横断的な視点で物事をとらえ、実社会での課題解決に向けて創造的思考力や論理的思考を育む学び

エ）地域の方々や職業人など多様な人々と関わりながら、地域の特色や産業を題材に地域の魅力や課題を知り、自分たちに何ができるのかを主体的に考えて行動する課題解決型の学び

オ）異なる文化に対する理解や郷土への愛着、語学力やコミュニケーション能力などを高め、将来、世界にあっても地域にあっても活躍できる力の育成に向けた学び

カ）ICT をはじめとした先端技術を手段として積極的に活用しながら実社会の課題等の解決をめざし、人間ならではの考え方で新たな価値を創造できる力の育成に向けた学び

（３）多様な生徒が学べる環境の整備

義務教育段階の学び直しが必要な生徒、日本語指導が必要な生徒、特別な支援を必要とする生徒、不登校の状況にある生徒、経済的困難な状況にある生徒等の個別の学習ニーズに応え、将来のキャリアや職業等に希望を持ち、安心して学びを続けることのできる環境の整備

（４）少子化の中での学校や学びの特色化・魅力化の推進

ア）生徒の多様な進路志望に対応するとともに、これからの時代に求められる力を備えた人材を育成できる普通科、専門学科、総合学科、定時制、通信制における学び

イ）小規模高校の総括的な検証をふまえ、全ての県立高校に通う生徒に部活動も含めた教育活動の中で社会性・人間性を育むとともに、生徒の学習ニーズに対応した幅広い科目の開設や専門性が維持できる学校の規模やあり方

ウ）生徒の学びのニーズを基本としながら、通学環境、地域における高校の役割をふまえた学校の配置

（５）特色・魅力ある教育の実現に向けた学校経営と教職員の資質向上

ア）多様な主体との連携・協働など、学校内外の教育資源を最大限に活用した教育の推進

イ）校長のリーダーシップのもと、学校内外の人材との連携と分担を通して様々な課題に対応できる学校マネジメントの推進

ウ）各学校において育成をめざす資質・能力等に係る教育活動の指針の明確化とカリキュラム・マネジメントを通じた教育活動の改善

エ）生徒の可能性を引き出すための個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた教職員の資質の向上

オ）中学生や保護者、中学校教員をはじめ広く県民の皆さんに向けた各学校における特色・魅力ある教育の情報発信